

サヘルの森の現場は何拾、何百の村！

小島通雅

マリの現場はどうなっているの？コロナ、それにご存知かもしれないが、クーデターもあって、日本人が今年はマリに行けていない。でも現場は心配なく、それ相応に動いている。何故そう言えるか、少し書いてみる。

まず、やっている場所が何処と何処の村々にある何々処、そこで何人が働いているという限定的な現場ではない。30 数年前、北の砂漠の中でスタートした時は村に住み込んで苗を作り、村人と一緒に植えていた。しかし、ここ 10 数年はバマコやファナに拠点を置き、村を訪ねて村人に苗木を配布し、或いは学校を訪ねて苗を配布し、村人に植えてもらっていた。全ての場所に同じような頻度で苗を配りに行っていたわけではない。1 カ月に 1~2 回行く村もあれば、前に行ったのは数年前の所もある。サヘルの森の現場は何拾、何百の村にのぼるだろう。

北の砂漠の中と違い、今の地域は雨量も多少多い。しかし単年生のいわゆる農作物だけでは毎年の雨量の変動に耐えられない。昔から各種の多年生樹木から葉菜、油脂原料、糖分、香辛料、繊維等々多くのものを原料として得ていた。すなわち、農作物+樹木ミックスで農民は生きてきた。薪炭や使役動物の飼料もある。配られた苗は、庭、井戸の周囲、菜園の周囲等に植えて育てている。村人が生きていく限り木は育っている。大きくなり葉が茂ればヤギやウシが来て食べて行く。実がなれば採って隣村のマルシェに売りに行く。

村人への苗木配布、学校林の造成と共に、ファナ周辺で 10 年以上続けていた試験地の顛末について少し書いておこう。サヘルの会は北で始めた時から植林用地をお金を払って借りるということをしたことがない。ロバで通る道の傍であったり、畑の辺であったり、菜園の縁であったり。ファナで試験地を始めるときは、村長がアフリカ伝統医療をやっている小さな村を見つけ、その入口辺りの荒地を使わせて貰う事とした。草や木の根を掘ったり抜いたりしなければ良いという条件で、革手袋と剪定鋏を渡して…。そこで道路からの排水を利用した植林試験や、白アリの巣を利用した植栽など。しかし御多聞にもれず、マリでも諸外国からの援助で幹線道路の拡張工事や工業団地の開発が次々に進んでいる。こうした開発で落ちたお金が幹線道路沿いの土地買収に廻され農村生活と結びついた里山はなくなっていく。試験地もあつげなく売られてしまった。

新しく始めている里山再生の研修制度にも少しふれておこう。ここでのテーマは「村人から村人へ」である。村人や学校へ配る苗木はバマコで探せばいくらでも手に入る。しかし、なるべく苗を配る近くの地域で手に入れたい。ということで、地域の小さな苗畑を探していた時期があった。その時に見つけたのが街道から外れたちょっとした地形上の利点をうまく生かした苗畑、専業ではない。農業もやっている。いわば篤農家のような人の所だ。ここを研修の場を選び、ここに村で選んだ研修生を連れてくる。教えることは少し、各自が知りたいことを見聞していく。村に帰って実践者として自分の畑、荒地でやってみる。何か問題があれば、地域苗畑主の所へ相談に来ることができる。本来の農業技術の伝承はそうしたものだっただろう。

現地活動よもやま話

榎本 肇

現地スタッフのトラオレさんは、話が上手で、きちんと順序立てて、単純化して話してくれるので、とても分かりやすく理解しやすいです。報告書は現場を訪れる度に作成し、月1回メールで送ってくれますが、定期的に Skype 通話などでも話を聞いています。

今回は、報告書には書ききれない、現場活動の様々な話をお届けします。

実践者と会のつながり

里山再生を行う実践者と会がどのように関わっているのでしょうか。

まず、初めは里山再生に必要な技術研修を行い、次に彼らが村に戻って実践していく上でのフォローを行っています。特に苗木の生産については、苗畑を囲う金網であったり、育苗ポットや種子などを供与したり、苗木作りをスタッフが共に行ったりして、研修で学んだことを自分のものにしていく実践の過程を大切にしています。

また、実践者を育てるうえで、もう一つ重要な点は、こうした木を育てていく先駆者を多く育て、他の多くの人に関心をもってもらうことです。技術的には、研修の講師を担った地域苗畑主と実践者、あるいは実践者同士の交流によって、様々な気づきや着想を得られるように関係づくりをしています。

トラオレさんに話を聞くと、日本人がいなくても、実践者たちはスタッフの訪問時に頼み込んでついて行き、地域苗畑主や他の実践者のもとを訪れて、情報交換をしています。



実践者間の情報交換

さらに、定期的には実践者のもとを訪れることで、いろいろな変化を発見することができます。実践当初はあまり気が入らず、育苗も

ほんの少しだけ、植えた木も保護が不十分でしたが、植えた木が育ち始めた途端にやる気を出し、村で一番のユーカリの育成者となった実践者もいました。

ファナのユーカリ事情

そうしたやる気が出てきた実践者の一人、カソマブグー村のイーサさんは、これまで育苗を行うもうまくいっていませんでしたが、今年は苗木をユーカリ 2,000 本も育苗し、兄と共に 0.5ha の畑に 1,000 本近く植えました。



畑に苗木を運ぶイーサさんの兄

その背景には、ファナ地域でのユーカリ事情がありました。大きな町では人口が増えて人が集まり、多くの建物が建設されています。村では泥で作る日干しレンガの家ですが、町であるとコンクリートブロックの家になります。その建設には、屋根が固まるまでの間、下から支える補助材が必要で、補助材に細径のユーカリが使われます。

サヘルでも度々購入していたマルカコンゴの地域苗畑主のトラオレさんは、この補助材のリース業を始め、イーサさんが以前植えて育ったユーカリの材を畑にあるだけ全部買い取ったのだそうです。

幹線道路沿い分譲地の生産活動と村人

機関紙でも何回かお知らせしましたが、幹線道路沿いの土地が都市住民に分譲されています。都市住民は、将来の地価上昇を見込んでの投機目的もありますが、排気ガスで霞む都市の生活を離れ、週末に環境の良い田舎で過ごすための住居を作る人もいます。また、灌木林を切り開いて、畑にしたり、ユーカリを植林したりして、様々な生産活動を行う人たちもいます。



分譲地に建った簡易宿泊施設

トラオレさんから、昨年まで会で行っていた試験地近くに魚の養殖池ができたと言いました。もともとそこは雨水がたまる窪地で、イネの原種が生えるような土地でした。その土地の購入者は、重機で堤を作り、雨水をため、池にしたのです。まだ、魚は放たれていないようですが、閉鎖水域なので、ナマズの養殖がおこなわれるのではないかとみています。

こうした生産活動には、近隣の村人たちが雇われて、ことに当たるようです。養殖池の所有者は他にもユーカリ林を育成しており、灌漑などの管理に近隣の村人を雇っています。また、他の土地の所有者は、土地の境界を明確にするため、ユーカリを植林しましたが、その作業には同じく近隣の女性たちが雇われました。その現場を見ると、丘の上の水環境の悪いところながら、とてもよく生長していました。植樹に関わったという村の女性たちの技術力なのか、それを指示した所有者の技術力なのかは不明ですが、都市の資本に

より、こうした生産活動がこれからも行われていくのでしょう。



土地の境界に植えられたユーカリ

実践者の中には、他の土地からの入植者も含まれていますが、村の外から来た者は新しいことを行うのに制約が少ないのかもしれませんが。都市の資本により、より大きな変化が村にもたらされ、雇用による生産など、村人たちにも大きな影響を与えていきそうです。彼らの変化に注視しつつ、小さくてもいいので、村人が自身で木を植え、育て、使うことで、自然の木も保護していく方向性を大事に育てていきたいと感じています。

マリ生活点描



道に川のように水が流れるほど雨が降る中、木の葉の束を自転車に乗せて運ぶ男たち。朝早く出て、郊外の林から切り出し、バマコの市場に運び、夕方まで家畜の飼料として売る。ただでさえ重いのに、雨でさらに重量が増す。

おもしろ在来種～第3弾～ マリのカキ (*Diospyros mespiliformis*.)

2015年6月、ファナのテニャンブゲー村で苗木配布を行い、村人の菜園を見に行く機会があった。住居から離れた畑の中を進み、囲った菜園の中で苗木を植えている場所を確認した。菜園の隣はブッシュが続くような村はずれである。戻ってくるときに、菜園の近くであまり見かけない小高木の樹木に出会った。



若いアフリカガキ

葉は小さめ、長さ10cmほどの卵形。ちょうど実が着いていた。見たことのあるような形である。緑色の小さな柿のようである。大きさは2cmぐらい。名前を聞くと、スンスンという。あれ、スンスンは苗木を配っている種類だが、違っていると言うと、配っているのはトバブースンスン（トバブーは「外国の」の意）という種類であるという。



アフリカガキの実

調べると、配っている苗木は、学名が *Annona squamosa*、和名がシャカトウやバンレイシと呼ばれる種類である。英名は sugar apple。バンレイシ科でお釈迦様の頭のような模様の甘い果実がなる。原産地は熱帯アメリカである。マリにもバンレイシ科の樹木で在来種のダンファ (*Annona senegalensis*) があり、似たような実がなる。この辺りが混乱を生じさせている。

この小さな柿が本当のスンスンであるという。学名は *Diospyros mespiliformis*。アフリカに広く分布している柿である。和名がアフリカガキ、英名が monkey guava というそう。カキの匂いがする。熟すれば食べられるという。

そのあと、マルカコンゴの町はずれで大木のカキの木を見つけた。このあたりには自生の大きなバオバブやネレ (*Parkia biglobosa*) も点在している。



大きなアフリカガキの群生地

アフリカガキは、森林を再生させるに際し、取り敢えず植えるのに適した樹種とされている。機会があれば、苗木づくりと配布、植林を行いたい樹種である。（坂場光雄）



アフリカガキの樹皮

会員番号539のあゆみ

飯塚真利子 (会員番号 539)

会員番号物語をいつも楽しみにしている者ですが、私の場合北極星を観るようには言いませんが、遠くから仰ぎみている感じで30年ほどついてきたようなものです。

新聞の社説でサヘルの会紹介記事を読んだ時、何かロマンのようなものを感じました。遠いアフリカの地に思いを馳せ、自分ごととしてサヘル地域の砂漠化を考え行動する、単純に感動し、応援したいと思い会員となりました。当時の私にとって最大の関心事は子育てでした。子どもにとって大切なことは何か？その中の一つが自然環境で、同時期に設立された世田谷トラスト協会の会員にもなりました。子どもにとってふる里となる世田谷の自然や歴史ある建物等を少しでも残しておいてあげたいからです。そして地球規模の視野でマリの植林活動に取りくむサヘルの会を通じて何か学べるのではないかと考えました。

親子で参加して思い出に残っているのは、スポンサードウォークです。10キロほどの道のりをポイントごとに寄付額を設定して寄付を募るというものでした。寄付をお願いする段階でサヘルの会の説明とスポンサードウォークの説明をする必要があり、身近な人への広報の機会となると共に、ポイント毎に幟旗を立てたり、パネル展示したりすることで広報活動が一度に多くの地点でできるメリットがあるのではないかと思いました。参加者としてはアフリカの太鼓演奏があったりして楽しめましたし、久我山から小金井公園まで歩いた時は、子どもが小さかったからか取材を受け、後日新聞に写真入りで紹介されたことも思い出となっています。また子育て仲間が集まってもらい、事務局の高津さ

んに集会室のような所でお話して頂いたこともありました。が、どんな内容だったか覚えていません。ごめんなさい。高津さん。

子どもに大切なことを伝えたい、その思いで会員となった訳ですが、単に関心をもつという程度ではほとんど伝わらないまま子育て期を終えてしまいました。会の変わらぬあり方、単に木を植え、物を提供して満足するのではなく、生活している人々の自主性を待って、自分達の暮らす土地を豊かにしていくことの良さを、あせらずに暮らしの向上をもって体感してもらえるように援助し、実践していってもらえるようにする。何と気の長い取組みかと思いますが、これこそが遠回りでも将来にいきってくるということを、活動報告等の中から少しずつ理解していくことができました。

そして10年前、マイホームを持つにあたりいろんな場で家造りに関して学ばせてもらう中で、家を建てることの自然に与える負荷の大きさを初めて考えさせられました。あれこれ失敗を重ねてたどりついたのは伝統工法の家でした。近場の木材を用い、なるべく自然に帰る素材で、アンカーボルトを使わない使用しない、昔からの家造りです。珍しくはありますが、決して高価ではなく、普通の民家です。

私の環境問題に対する意識は、こうして振り返ってみた時、サヘルの会との出会いから始まり、家造りまで繋がってきているように思われます。これからも、地道に歩みを発展させつつ継続していくであろうサヘルの森の活動に、マリの人々による植林の広がりを期待してサポーターを続けたいと思っています。

…会員番号は整理のための数字ではない。

会員番号にはひとつずつのドラマと思いがある。今は欠番の人の思いも積み込んで、会は前に進んでいきます。(サヘルの森)

スンバラ冒険譚と京都のマリ人学長

最近読んだアフリカ関連の書籍を2冊
ご紹介します。(高津佳史)

◆「幻のアフリカ納豆を追え！」◆

(高野秀行、新潮社)

表題のアフリカ納豆というのは、マリでいうスンバラのことです。マリを含めた西アフリカの多くの国でパルキア(ネレ、*Parkia biglobosa*)という木の種子(豆)から作られる発酵食品で、私もマリの市場で干したスンバラをよく目にしていました。ただ使い方については調味料の一種としか理解しておらず、スンバラ味噌とも呼ぶので味付けに使う程度と軽く考えていました。

ところが、本書で初めて西アフリカ料理の基本のダシがスンバラだと知りました。ダシの風味を生かした「京風」の味付けが西アフリカ料理の特徴だったのです。味の素やマギーイオンが市場にあふれていたのも、このダシ文化があったからでした。

目にしているだけでも本当の意味を理解するまでに何と30年もかかってしまいました！

◆「サコ学長、日本を語る」◆

(ウズビ・サコ、朝日新聞出版)

京都でNPO関係者と話した際に、著者のことを「日本一有名なマリ人」と評していました。京都の大学で建築を教えながら、初のアフリカ出身の学長になった方です。ご専門は環境共生建築の研究。私も似たような仕事をしているのでマリの住宅についての考察を興味深く読みました。

例えば、台所・ダイニングと部屋ごとに役割を区別するのは先進国特有だということです。マリの家の「中庭」は台所兼ダイニング兼寝室になりますし、途上国のスラム街なんかも1部屋に全ての役割が詰め込まれています。アフリカあるあるですが、著者のバマコの実家には、いつも親戚や知り合いが暮らしていて、家の中と外の区別があいまいな状態が普通だったそうです。

最近、自然との共生とか多様性という言葉を目にしますが、自他の区分さえあいまいなマリの住宅は、究極の「環境共生住宅」かもしれません。

Club SAHEL 本格始動！

サヘル森の森の活動を紹介するメーリングリスト「Club SAHEL」は、2014年に運用を開始したものの休止状態でした。

2021年1月より本格始動します！

Club SAHELは、会員や協力者の皆さまとスタッフが気軽に情報交換できる場です。特に、バオバブを過去にイベント等で購入してくださった方やモリガ等、マリで植えている植物の育て方がわからない・これから育ててみたいという方には必見です(ご希望があれば送料等経費は頂戴しますが種をお分けすることもできます)。

スタッフからの発信だけではなく、参加者の皆さまからの生育状況の投稿や質問も歓迎します。他に、毎月の活動や、事務局からのお知らせなど、最新の話題も提供する予定です。

会員でなくても登録可能です。お気軽にお問い合わせください。

■ Club SAHEL 登録方法 ■

1. サヘル森事務局(下記アドレス)宛てに、件名:【Club SAHEL 登録】でメールを送る。
(sahel-no-mori@jca.apc.org)
2. 「Google グループ: Club SAHEL に追加されました」という登録完了メールが届く。
3. 登録終了

サヘルキャンプ 番外編 「つるばみ（くぬぎのハカマ）染め」

米倉 伸子

今回のサヘルキャンプは、直前でコロナの感染者が大きく増えたので、残念ながら中止になってしまいました。もし実施していれば、今回の草木染めで体験する予定だった、「つるばみ（くぬぎのどんぐりのハカマ=実のへた）染め」について、報告します。



くぬぎは関東地方では、ケヤキと並んで里山の景観を作り、コナラと合わせて薪炭材として重要な植物です。またシイタケの原木として使われたりして、カブトムシやクワガタにとっても良い住処となっています。

毎年キャンプを行っている、瀬谷区中屋敷の作業場に隣接して、くぬぎが植えられていて、そこでたくさんどんぐりや「そのへた=つるばみ」を集めることができます。

くぬぎは奈良時代の万葉集にも歌われ、平安時代には延喜式にも載っていて、昔から庶民の衣類を染める材料でした。

樹皮・緑葉・堅実を使って染め、灰汁や明礬の媒染で肌色に染まり、また「どんぐりのへた=つるばみ」で染め、鉄媒染すると黒茶色に染まります。

去年はヤマモモ=渋木で黄茶色を染め、今年のはつるばみで黒茶色を染める予定でした。

来年のキャンプの頃にはきっとコロナが収まっていると思うので、何で染めようかと今から考えるのが楽しみです。



素材によって異なる風合いが面白い

試作した綿ハンカチ、麻のスカーフ、シルクストール、それぞれの風合いで染め上がりました。

国内活動(7月～11月)

< 定例活動 >

- ・7/18 日野ふるさと歴史館と黒川清流公園
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・9/19 赤塚公園、浄蓮寺の東京大仏
- ・10/17 区立美術館の森と中村かしわ公園
*雨天中止
- ・11/21 サヘルキャンプ2020
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・12/19 さくらの美術館とめぐろ歴史博物館
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止

定例活動(1月～3月)

新型コロナウイルスの感染状況や天候等の事情により急遽中止となる場合があります。

ご参加希望の方は必ず事前に事務局までお知らせ下さい。

- 1月16日(土) 10:30 集合
雑司ヶ谷七福神
集合場所: JR山手線・目白駅改札
- 2月20日(土) 10:30 集合
辰巳の森海浜公園と洲崎神社
集合場所: メトロ有楽町線・辰巳駅改札
- 3月20日(土) 10:30 集合
野沢稲荷と世田谷公園
集合場所: 田園都市線・駒澤大学駅改札

ブログのご案内

今年は日本人スタッフの派遣ができませんでしたが、現地スタッフのトラオレから送られてくるレポートなども写真付きで掲載しています。

その他、坂場代表の植物コラムなど掲載しています。是非ご覧ください。

サヘルの森スタッフブログ
<https://sahelnomor.exblog.jp/>

2021年度会員総会

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大を受け急遽書面評決となりました。来年度はできるだけ対面で行いたいと考えていますが、今後の状況次第で変更の可能性があります。

会員の皆様には3月に入ってから資料とともにご案内致します。

日時：2020年3月下旬
場所：町田駅周辺公共施設

*書面評決に変更になる可能性有

クリスマス募金のお願い

新型コロナウイルスの終息とマリの平和を願って、毎年恒例のクリスマス募金へのご協力をお願いします。

今年度はマリへ日本人技術者を派遣できず、助成金の収入も大幅に減り、厳しい一年でした。マリの人びとにとっても、新型コロナウイルスやクーデターなど不安な一年であったと思います。しかし、現地スタッフや過去にサヘルが行った「里山再生実践者研修」を受講した実践者たちが中心となり、苗木配布や里山再生実践の事業を継続しています。

どうか皆様のご協力をお願い致します。

お振込みの際は同封の振込用紙をご利用下さい。

苗木募金で里山再生

苗木募金は一口500円から受け付けています。500円で、アフリカでは2本の苗木を村人に届けることができます(スタッフの派遣費用も含める)。

募金の際は「苗木募金」と明記下さい。



2019年6月 女性にはバオバブの苗木
ファナ地域 ファラダラ村

振込用紙ご記入時のお願い

会費やご寄付でお振込み頂く際、振込用紙に領収書の要・不要を必ずご記入ください。

尚、サヘルの森は寄付等による所得控除の対象になりません。

ご協力のほど、よろしく申し上げます。

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000円
- ・維持会員 年 20,000円

特定非営利活動法人 サヘルの森

住所：〒194-0013
東京都町田市原町田 1-2-3-403
TEL：042-721-1601 (留守電対応)
FAX：042-721-1704
郵便振替口座：00170-6-115054

HP：http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/
BLOG：http://sahelnomor.exblog.jp/
E-mail：sahel-no-mori@jca.apc.org

機関誌『サヘル』No.107 2020年12月18日発行

発行人：坂場光雄 / 編集：榎本肇
